小学校の授業実践を学生とともに追試する
―「生活科指導法」の授業事例から―

Retesting the elementary school class practice with students
－From the case studies of The method of living Environment Studies－

山嵜早苗
（Sanae Yamazaki）

「有明教育芸術短期大学紀要」第11巻抜刷

令和2年3月20日

（本文自69頁　至80頁）

小学校の授業実践を学生とともに追試する
―「生活科指導法」の授業事例から―

Retesting the elementary school class practice with students
－From the case studies of The method of living Environment Studies－

山嵜早苗
（Sanae Yamazaki）

要旨：
本研究は、自身が小学校教員として実践してきた生活科の授業実践を「生活科指導法」の授業の柱として活用した際の、授業記録の分析である。
生活科の内容のうち、「自然・飼育」などの体験活動をどのように学習につなげていくことができるのか、また表現活動や言語学習にどう発展させていくことができるのかを取り上げた。さらに保護者や地域の人々とのつながりをどのようにつくり出していったらよいのかなどを授業実践から読み取り、体験活動も含めて学生たちが実際に追試体験し、その意義を理解していくような授業に仕組んできた。
この授業実践の活用が、生活科の体験的な学びや表現活動は学級経営と深くつながり、子どもたちの自己実現に大きく貢献するということを学生たちの言葉から検証する。

キーワード：生活科　自然　体験を学びにつなげる　表現活動　自己実現

Ⅰ．研究の背景と目的

この授業のねらいは、「生活科の教科としての特徴や魅力を実践的に体験する中で理解できるようにする。子どもの実態や地域の様子、教師の見取りや評価の在り方についても考えることができるようにする」とシラバスにあるように、小学校教員をめざす学生たちに向けた授業である。しかし、本学では小学校教員の免許取得のみを当面の目標にしている学生が多く、小学校教員をめざすという強い気持ちを持たせたいと思い、授業に臨んできた。

10年間の中では、受講者が少ない年もあったが、研究会にいっしょに参加したり、採用試験に合格して教員になったりしている学生もいて本学の教職員たちに希望をもたらした。本論文では、この授業で取り上げた授業実践の紹介に重きを置き、学生の変容については、本学の子ども教育総合実践センターの論文集「子ども教育実践研究」で主に取り上げたいと考える。

Ⅱ．研究の方法

本授業は、「子どもの生活環境に即した単元構成を試みながら授業計画の立て方を指導する。生活科にふさわしい総合学習の計画と運営ができるように授業の実践例を参考にしなが

ら教材研究し、情報機器を活用した指導案の作成や模擬授業を行うことが出来る力を養う」（シラバス）という進め方に即して行ってきた。自身の30数年に及ぶ小学校教員生活の中でも後半の多くは低学年を担当し、生活科を中心とした授業づくりの研究を続けてきた。その経験をもとに授業実践を発表してきた。この授業では、これらの中から中心となる「自然」や「探検」などのテーマをどのように取り上げてきたのか、また埋立地のキャンパスで生活科の授業をどのように展開してきたのかを考察する。あわせてその方法と内容の変遷から、特徴的な授業例をもとに「生活科指導法」のあり方をも考察する。

Ⅲ．授業記録

１．シラバス（2019年）と取り上げた授業実践（太字は本論文で記述しているところ）

回数	授　業　内　容	実践論文
第１回	生活科の教科目標の構成について　自然を探索する活動**「のはらたんけんたい」**	A1
第２回	生活科の内容構成と教材研究について**「春の自然発見から自然料理へ」**	B1
第３回	気付きを深める振り返りと表現活動　**実践例「春の味交流会」**など	B2
第４回	身近な地域を探索する活動　**町探検で出会うもの・人・こと**	B3・C
第５回	自然の不思議さや面白さ発見「自然素材の遊び」の実際	G
第６回	継続的な飼育活動「生き物ランド」「ヤゴ救出作戦」ＰＣ教材の活用の工夫	D
第７回	継続的な栽培活動　有明農園で野菜を育て夏野菜料理に挑戦！	A2
第８回	幼児教育との接続**「なかよし学校探検」**	E
第９回	交流する場の工夫　お年寄りと伝承遊び	B4
第10回	他教科との関連的な活動　**創作曲「ザリ君の目はビー玉」**	F
第11回	伝え合う活動　自分の成長**「自分のきらり　みんなのきらり」**	B5
第12回	生活科の指導計画の作成　24か月の年間指導計画と評価	D
第13回	単元指導計画の作成　各自が設定した地域・子どもへの指導案づくり	
第14回	生活科の学習指導　情報機器を使っての模擬授業　指導案の提出と修正	
第15回	まとめ	

２．この授業で取り上げた実践論文の概略

Ａ**「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」**

Ａ１は、小学２年生が「のはらたんけんたい」として自然探索したものを「のはらうた」の詩に表現化した春と秋と２回の活動と発表会をまとめた部分。春は、１年生と３年生に聴いてもらい、秋は、地域のデイサービスで発表会を行った。

Ｂ**「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」**

Ｂ１は、春の自然発見から自然料理へ、Ｂ２は料理での気付きを伝え合う「春の味交流会」の活動の紹介、Ｂ３は秋の町探検での食べられる自然探しから食べにくい木の実をどうするかの調べ学習、Ｂ４は地域のお年寄りといっしょに「手ごわい木の実にちょうせん―自然と僕らの知恵比べ」の授業をつくった経験と授業の発展について、Ｂ５は１年間を通した生活科を中心とした学びのまとめ方と子どもたちの成長についての内容を授業実践から取り上げた。

C「**自然を食べる―生活科から総合入門期の授業づくり**」は、生活科の身近な自然を採取して食べた「自然を食べよう―春夏秋冬―」を基にしながら、更に自然や地域への関心を深め、人間の暮らしとの繋がりを追究して行った総合入門期の授業。

D「**ヤゴを育てて問いを立てる**」は、大学生がヤゴを育て羽化させた体験活動から課題を見つけ調べていく生活科の学び方の紹介。

「**生き物を育てた喜びと悲しみを心に刻む**」は、24か月の継続的な飼育活動やハムスターが亡くなった時の子どもたちの対応などの紹介。２年間の活動を模造紙12枚の大きな絵に表現した造形活動との合科的な学習の紹介。

E「**なかよし学校たんけん**」は、単学級の学校で、大きな学校の施設や職員の様子を兄弟学級で探検した実践。1年生に紹介したいと主体的になった２年生の感覚がよくわかる例。

F「**合科的学習で生き生きと成長した子どもたち―生活科学習における合科的学習の可能性―**」は、ザリガニ飼育の経験を創作曲にして歌ったり、美術館で踊るダンスにしたりした作曲家や振付家と協働活動した経験。生活科の学びの発信は、多様にできるという例。

本授業では、これらの授業実践を読み、その中から大学でもやれるものを実際に追試してみることを交互に行った。

(1) 小学校の授業実践Ａ　春の自然探索から発見したことを詩作した表現活動

「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」の授業実践は、２本ある。

2003年に街中の緑町小学校で実践した後、2005年に埋立地の高洲二小で実践したものである。子どもたちの自然離れへの危機感が生活科誕生の一因にもなっており、自然体験をどう教材化するかという提起になっている。日常的に行っていた「走りもの変り種探し」や、のはら村の住人になって名前を考えたり、「のはらたんけんたい」になって自然探索したことを「のはらうた」の詩に表現したりした合科的な学習である。

ここでは、主に緑町小学校の実践論文をＢ１～Ｂ５の５回に分けて読みながら学んだ。

①大学での授業から「のはらたんけんたい」の活動―春の野草から学ぶ意義

毎年第１回目の授業は、江東区にある本学の有明キャンパス内を歩きながら野草探しや木々の幹などに触れる「のはらたんけんたい」に相当する自然探索活動を行う。そして、なぜ埋立地のキャンパスにツクシが生えているのか、春の野草代表とも言えるヨモギやタンポポはなぜ春の七草に入っていないのかなど、学生の疑問をかき立てる授業にする。

春の七草を暗誦するのだが、セリやナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、スズナ、スズシロは、初春に生えている野草であり、七草粥は正月のご馳走に疲れた胃腸を癒す薬膳であることに気づかせる。野菜が二つ入っているが、どんな草か。スーパーにも売っている七草は、大切な春の伝統食なのだと学生たちにも意識的に考え始めさせるために取り上げた。

そして、春が本格化すると人々は山菜採りや草摘みをして春を楽しむ。特に雪に覆われた北国の人々にとっては、フキノトウの苦みも春の到来を待ちわびるものであることなど、季節と地域の関係を学ぶ。

この授業では、教育実践Ｂ「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれあいの教育」を資料として読んだ。（以下、囲み内は論文の要約）

ばばばあちゃん（注１）の真似をしてヨモギ団子づくりや小学校の庭に生えているフキの煮物、たわわに実っている夏みかんのジャムなど自然物を使った料理を開発した実践だ。
自然物を採取して料理していく学習は、子どもたちにとって「草が食べられるって本当？」という驚きとなり、粘土遊びの延長の団子づくりや苦い物や手ごわいものをどうやっておいしく食べられるようにするのかを調べたり考えたりする「自然と僕らの知恵比べ」の学習へと発展していった。地域のお年寄りの知恵を借り、若い保護者たちもいっしょに学んだ1年間を通した実践だった。
「自然を食べよう」の授業は、緑町小と高洲二小の両方で行った。学校のある地域の違いによって、子どもたちの興味関心を持つところが変わり、同じテーマでも異なる授業ができた。緑町小では、春の自然料理が秋の町探検から秋の木の実調べ、そして食べにくい木の実をどう食べるかという調べ学習に発展していった。

埋立地の高洲二小では、春の野原探検が春の「のはらうたづくり」の学習に発展し、秋の「のはらうたづくり」発表会に連続していった。校内にある桑の実や夏みかんのジャムづくりなどを行ったが、子どもたちとともにその地域に即した授業を構想することが大切であると学生たちに気付かせたかった。
学生の感想からも春の体験活動は、学習を進めていくきっかけになるということを実感していることがわかる。（下線部分）

感想１　ヨモギを使って団子をつくることで、春の草を知ることができたり、春にはどんな植物があるか、他のものに興味関心をもつきっかけにもなってとても良かったと思う。子どもも季節によって楽しむことが違うことを知れて、いろいろなことに興味を持てるようになるのではないかと思った。（ＭＴさん）
感想２　ヨモギ団子の作り方を改めてみると、子どもから見た気づきがたくさんあると思った。生活科という教科の中に自然から学べることを取り入れることはとても良いと思った。子どもたちの記憶にも残り続けるし、大切な経験だと思う。（Ｋさん）
感想３　小学生以来、ヨモギ団子をつくってみてとても楽しかった。当時と今では視点も違い、実際の授業で行う時は、注意すべきことが必要だった。火を使ったり包丁を使ったりするので注意するべきことをしっかり伝えたり、作っているときには、においや触った感触などを学んだりすることができて、とても良いと思う。特別な授業は大人になっても忘れないし、印象に残るような経験ができると思った。（Ｍさん）
感想４　今日の授業で、春の七草について学び、春の七草なのに、七草に入らない草に疑問を持ち、考えさせられるような内容で楽しかった。また生活という教科は、一般的なものではなく、子どもたちの生活と照らし合わせて行きながら授業を進めていくことを学んだ。（Ｉさん）

１回目の授業の段階で、生活科の授業について年間をつなげていくおもしろさをつかんでいたり（感想１）、全国共通な一般的な内容ではなく、その地域や子どもの生活に即した内容にしていく（感想４）という教科の本質的なねらいをつかんでいたりすることがわかった。つなげて勉強していくということは、子どもたちの興味関心を広げ、わかりやすくなると感じていた。「生活科の学習は、楽しいけれど何をやっているのかわからなかった」という声

に応えるような学習にしていく必要性に共感することができているのだと思った。

②大学での授業から　春の自然発見から自然料理へ―気付きの深まりを引き出す

初めて本短大のキャンパスを探索したとき、土手にツクシが生えていたのに驚いた。埋め立てに使った土は、野草の生える山野地から運ばれてきたのだと考えた。ヨモギやノビル、タンポポなどもあった。春の野草に興味を持たせたいと思った。「飼育栽培」の授業で有明農園をつくったところには、アロエや明日葉、フキなども植えた。根づいて毎年、大きく成長している。授業開始の4月初め頃には、ツクシは枯れそうでスギナが群生していたり、業者が植木の手入れをしているため、野草があまりない状態でもあったりした。しかし、わずかな野草も大切に摘んで学生たちとつくった自然料理は、ヨモギ団子ばかりでなく、有明キャンパスに生えている野草でつくるツクシの卵とじ、野ビルのみそ和え、タンポポの天ぷら、明日葉のお好み焼き、アロエヨーグルトなど、毎年メニューが増えていった。グループごとに違う料理を作って、いろいろな味の交流を図ることができた一方で、じっくりヨモギ団子のつくり方を学び、その中での気づきを大切にしていくことがおろそかになってしまう傾向もあった。ヨモギ団子だけを作ることに集中したところ、ヨモギ団子のレシピに学生たちの気づきも詳しく書けていた。

ヨモギ団子レシピとＨさんの気づき

①ヨモギを見つける
②ヨモギを洗う
③ヨモギをゆでる
④白玉粉をこねる（耳たぶ位の固さ）
⑤ヨモギを刻む
⑥白玉粉に混ぜてこねる
⑦団子の形を作る
⑧ゆでる
⑨ゆで上がったものをすくい上げる
⑨団子を冷やす
⑩皿に盛りつける

フキの葉に載せたヨモギ団子の完成！

①こすると匂いがヨモギの匂いになるのがおもしろくて
②の洗う場面でも更に香っていた。
③水の色が緑になった。20分と聞いたが10分で良いのでは？と思うぐらいくたくただった。
⑥耳たぶの硬さが難しくてわからなかったけど結構固くしておいたらヨモギを入れて本当にちょうどよくなった。
⑧ゆであがったら浮かぶと聞いていたが、本当におもしろいぐらいぷかぷか浮かんできた。また色がゆでる前は白っぽかったのに、ゆで終わったら緑っぽくなってヨモギらしさが出ていた。
⑪味は普通のおだんごと変わらなかった。臭みもなく普通にパクパク食べることができた。ただ普通のお団子より少し爽やかな味がした。ゆでても大きさや形は変わらず、そのままだった。ゆでる時は茎を取った方が刻みやすく舌ざわりも良かった。

ヨモギ団子レシピと大学生の気づきも五感を多用して書いていることに気づいた。

次に、季節の変化とともに学習を深める学びを追求した授業実践の続きから学んだことを取り上げる。春の学びが子どもたちの興味関心により発展していった実践である。

(2) 身近な地域を探索する活動―町探検で出会うもの・人・こと

この小学校での学習は、秋に作った干し柿は、いつ頃食べるのか？冬に食べられることから保存食の存在や外国の果物はどんなふうに保存するのかなどへも興味が広がって行った。子どもたちとともに季節と食文化との関係に気付いていった実践だった。

『ヨモギ団子』の絵本を読んだり、ヨモギ団子をつくったことがあったりした学生はいたが、この秋の実践「手ごわい木の実にちょうせん」は、未体験の学生が多かった。

渋柿を甘くする方法や臭い実の銀杏の取り出し方、花梨のど飴のつくり方などは、支援者のお年寄りと開発したものなので、大学生にとっては未知の体験だった。農家の軒下に渋柿をつるした風景は、日本の晩秋を象徴する美しいものだが、先ず有明地区のような都会で見かけることはできない。また甘くする方法がいろいろあるので、是非体験させたいと思ったが、本授業は、前期８月までの授業であり、実際に試してみることはできなかった。本学2年生後期の「生活」の授業で、キャンパス内のドングリを拾い、どんぐり煎餅をつくることはできたが、この秋の実践の追試は、写真などから子どもたちの活動を知るのみになってしまったのが残念であった。

干し柿から干しイモづくり、暑い国のドライフルーツであるバナナチップづくりなど、子どもたちの調べ学習が広がっていく様子の詳細に学生たちは刺激を受けていた。

感想５　“自然”とは、一言で言っても春夏秋冬でいろいろなものがあるのがとても楽しいなと思った。季節ごとにどんなものがあるのかを実際に外に出て見てみるなどが授業でできたら、子どもたちもとても楽しめるのではないかと思った。年間通してつなげていくというのが、とても良いと思った。つなげて勉強していくことで、もっと興味が出て来るし、わかりやすくなるのではないかなと思った。（Ｎさん）

この季節をつなげる学習は、更に小学２年生の生活科学習を３年生の総合的な学習の時間につなげていった経験にも重なる。「自然を食べよう―春夏秋冬」をもとにしながら更に自然や地域への関心を深め、人間の暮らしとの繋がりを追究していく３年生の「自然を食べる―生活科から総合入門期の授業づくり」となった。

この授業は、次に転任した埋立地の高洲二小の３年生総合入門期の学習で、生活科の自然学習からつなげて、なぜ人間は苦いものや臭いものを食べるのかという疑問をもとに、苦いヨモギや臭いニラなどの成分を調べて「体にいいものなんだ発表会」の学習に発展させていった。２年生の生活科で「春の味はほろ苦い」と感じた子どもたちの感覚をもとに苦みや臭みの調べ学習を３年生の総合的な学習の時間で更に発展させたものである。子どもたちの疑問をつなげていくという学び方は、総合的な学習の時間に、グループでの発表後、一人一人の疑問に基づく個の調べ学習に形態を変えて１年間継続することができた。

(3) 継続的な飼育活動　「生き物ランド」「ヤゴを育てて問いを立てる」

今、学校での飼育活動が困難になっている中でも大学生が生き物と関わる授業の設定は難しい。ここでは、春の生き物探しや学校のプールを使ったヤゴから学ぶ方法を「生き物ランド」と名付けた飼育観察活動や「ヤゴ救出作戦」の実践から紹介した。生き物を継続的に飼育し、

オタマジャクシがカエルになるのを見届けたり、ヤゴがトンボに羽化する様子を観察したりすることは、比較的容易にできるものである。虫嫌いな大学生たちでもザリガニと遊び、脱皮や動きのおもしろさなどを直接目にする体験をすると積極的にかかわれるようになっていく。またその体験をもとにした表現活動である「ザリ君の目はビー玉」の創作組曲を歌うことをスムーズに受け入れることができるようになった。子どもたちの感受したことから音声表現、身体表現など多様な表現方法で学びがつくれるとわかり、親近感を持てるようになったのがよかった。よく口ずさんでいる姿が見られた。

(4) 大学での授業から　―授業実践D「なかよし学校たんけん」から有明の町探検へ

学校探検は、通常入学間もない１年生の実践として行われる。また２年生は、１年生をどのように迎えるか楽しみに準備している。遊びから学習への適応が困難な子どもたちの小１プロブレムの問題に対しても、１，２年生の共同学習は有効な学習方法である。そして、各学校の実態から学習を計画することが大事だということを学ぶ実践の紹介である。

> 昔は大きな学校だったことを偲ばせる４階建ての小学校が住民の移動変化などで単学級になってしまった小さな学校での「なかよし学校たんけん」と名づけた実践。学校探検は、入学前の子どもたちとの幼小交流から始まり、入学して間もなくの子どもたちが学校で働く人々や施設と出会う大切な学習である。高洲二小は、その後合併して高洲小学校になったが、各学年単学級の小さな学校であった。６年間ほぼ同じ友だちと地域や学校で過ごすという狭いが互いを良く知る子どもたちの実態による学習として、２年生が主体となる学校探検の授業を組んだ。１年生に知らせたい場所や教室などを２年生が工夫して案内した。その後、１年生は、自分たちで更に探検を続け、深めることにつながった。

この実践を学んだ後､大学生たちと有明の町探検に出かけた。ただ今江東区の有明地区は、東京オリンピックの競技会場になるところが工事中である。また林立するマンションの中には、ホテルの入口のような豪華な構えのものがあったり、強烈なビル風を巻き起こしていたりした。いつも通学時に見る外国からの観光客らしき人々がバスから降りて入っていく不思議な建物の謎解きをした。必ずインタビューをし、発表会をして大学生でも十分楽しめた。埋立地といっても昔からの歴史あるものと近代的なものが混在していて興味深かった。埋立地の秘密探しや有明の地名由来など、今後よりいっそう追求していきたいところである。
学生の感想からも学校の実態から出発するやり方に賛同する意見（感想６）があった。探検活動は、１回で終わるのではなく、もっと調べたいところに繰り返し出かけていく必要性を受け止めていた（感想７）。

感想６　学校たんけんを通し､新たな発見をしながら学ぶこともできるし､学校に来る楽しみのきっかけになると思った。また他学年といっしょにたんけんすることにより、２年生は１年生に学校や働いている人たちの説明をするために考えたりする。また１年生は、２年生の姿を見ていろいろなことを学ぶことができるような活動になっているのではないか。(Mさん)
感想７　有明の町探検の発表をし、調べたことやインタビューで分かったこともあったが、調べて

ないこともあったため、次もインタビューして聞いてみようと思えるような内容だった。また他の班の発表からは、私たちの班が見なかった周りの植物などに目を向けていたので、良かったと思った。（Ｉさん）

(5) 伝えあう授業実践　学級発表　自分の成長―「自分のきらり　みんなのきらり」

生活科の教科目標に「自立への基礎を養う」という文言があるが、自分の成長を見出だせる学習として生活科の意義を実践論文Ｂ５「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」の中から紹介した。

まず、学級通信を使った親子文集の作成。１年間の通信を家庭で保管していてもらい、３月に冊子として綴じる。家庭でも読み直し、１年間の成長ぶりを親子で確認できる。

最後の学習参観日の発表は、１年間の歩みの発表。毎年行う中で年々学級発表としての形ができてきた。保護者がビデオ撮影した内容をＣＤにしてプレゼントしてくれたり、感想を寄せてくれたりして心に残る表現活動のまとめとなったものを読んでいった。特に学級役員として活動に参加した後、転校して行った母親（ＭＡさん）の文は、年間を通して各実践の中での親子の学びを描いていた。

「二年生の一年間をふり返って　ＭＡ

この春休みに転校することになり、これほど早く緑小とお別れすることになるとは想像していませんでした。この一年をふり返ってみますと、緑小の思い出が凝集されていたような気がします。

最初は何といっても「ザリガニダンス」です。あまりダンス表現等は得意でなかった娘が一回も休まず参加し、自分たちの創造した詩やダンスのことを目を輝かせて話してくれました。また待ち時間を利用して、保護者の方々と校外懇談会もできて有意義でした。

二学期には町探検に同行させていただき、学区内の自然や文化を身近に知り、私が緑町を去りがたい一因ともなりました。

またバスで栗ひろいに出かけ、特大の栗に歓声をあげていた子どもたちも印象的でした。

一年を通じて生活科の授業（春の自然、秋の自然の調理等）にもかかわることができ、一緒に学び、子どもたちとの距離が近づいたような気がしました。

最後に三学期の授業参観は、とても見ごたえがありました。歌あり劇ありの一時間は、あっという間でした。手作りのあたたかさがあり、全員がはりきっていて、キラキラ輝いてみえました。クラスがひとつにまとまった瞬間でした。転校する娘にとって一番の思い出になったのではないでしょうか。

その他にも書ききれないほどの思い出をいただいたと思います。（後略）」

感想８「（親子文集）ザリガニを読んでみて、手書きならではの温かさと読みやすさを感じた。学年（級）だよりは小学生の時、親に渡すだけで子どもの私は見ることはほとんどなかった。しかし、自分の書いた作文が載ったり、友だちの作文、先生の手づくりでイラストがあったりするとよく読んでいたりした記憶がある。きっとこの学年（級）便りも子どもたちにとって読む楽しさになって

いて、保護者の方にも好印象で他の子の分もあることで違いにも気づけるものとなっていたのだろうと想像できた。」（Mさん）

「自立への基礎を養う」ことは、生活科1教科だけで達成できるものではない。しかし、生活科を通して子どもたちが自分を見つめ、よさに自信を付けたり、もっと自分の足で訪ねてみたい、人との出会いを大切にしたいなどの前向きな気持ちを持ち続けていったりすることができれば、そこに生活科の授業価値があると言えるのではないだろうか。

Ⅳ．学生が生活科をどう認識したか

（1）学生の感想から　生活科をどうつかんだか

学生たちが小学校時代の生活科の思い出として記憶していることは、楽しい「遊び」の教科だったという。教科としての意味はあまり感じていなかったが、この授業を通して生活科のおもしろさに触れ、授業づくりの可能性がある教科だと感じてきたようだ。

生活科の醍醐味は、気になったところを見つけ、調べていくという予定にはなかった活動、普段何気なく見過ごしていることの中におもしろさを見つけることであり、そこから生まれる新たな疑問を調べていくというサイクルにある。それを自然な流れ（感想９）と認めている学生もいた。

感想9　探検中、目的地までの道のりの中にも気になった施設などを見つけ、そうした予定にはない調査も探検の一つの楽しみなのではないかと思った。ふだん、何げなく通っている道にも注目してみるとおもしろいこと、知らないこともあり、そこからまた新しい疑問なども生まれていくのが、自然に様々なことを知れる流れになっていると思った。子どもたちも自ら楽しんで行えるようなことだと思う。（Hさん）

論文を読むだけでなく、自分たちも実践してみるとそのおもしろさの正体がつかめるようになってきて、子どもたちとやってみたい気持ちが育ってきたようだ。

地域の人や保護者も巻き込んでの生活科は、人との関わり方を学ぶ大切な機会である。どのようにかかわったらよいのかを具体的に学ぶことができたのではないだろうか。

（2）教育実習後の話し合いから

実習後の授業では、実習体験の報告を行っている。行く前は、不安そうで暗い表情をしていた学生が明るい顔で戻ってきた嬉しいこともあった。短大の場合、2週間という短い期間であり、授業も多くは経験できない。しかし、学校の雰囲気はつかんで来ることができる。中には、現場の教師の乱暴な言動に落胆して帰ってきた学生もいた。

私自身も小学校で教育実習生を受け入れることが多かったのと私自身の経験からも、この実習経験が教師になるかどうかの試金石になると考えている。そのため、実習体験を報告し合う中で、教師になるという選択をする学生が多くなることを願って「学級発表」の授業実践を教育実習後の話し合いで取り上げた。

その後、採用試験が迫っていたのだが、勇気を出して試験を受けに田舎に帰った学生もいた。

Ⅴ．授業のまとめ

(1) 生活科を中心とした表現活動

表現力の育成に力を入れてきた実践として､他教科との関連的な授業を紹介した。私自身、こういう授業が作れるようになったのは、ある程度経験を積んでからであったが、生活科の学びは、子どもたちの調べ学習から課題を見つけていったり、詩をつくるような国語科の学習と合科的な学習にしたり、歌やダンスなどの表現活動につなげていったりと、総合的な学びとして多様に設定できるということをつかんでほしいと思った。

授業実践から学ぶという授業を主に緑町小学校での実践から紹介したのだが、その中に教師の教材観、特に子どもとともに授業をつくるという考え方があった。学生たちは、それをどのように受け止めたのだろうか。

感想10　今日の資料の中の生活科の授業は、子どもたちが自分たちで体験して表現する特色を強く感じた。そうした授業の中だと子どもたちが自分から周りのものに興味を持って、その日学んだことから新しい発見をしている姿がうかがえた。そうした子どもが自分から活動し積極的に学ぶことのできる授業は良いものだと思う。そうした点が他の授業でも活かすことができないか自分なりに考えてみたくなった。

毎回熱心に受講したＨさんの感想に「子どもたちが自分たちで体験して表現する特色を強く感じた」とあり、更に「体験活動を表現活動につなげていくことを他教科でも活かせないか」と考えていた。多くの教科を担当する小学校教員として大事な視点を持てたのではないだろうか。

そして、次の感想では、自分自身に子どもと同じような気づきの発見があったことを書いている。

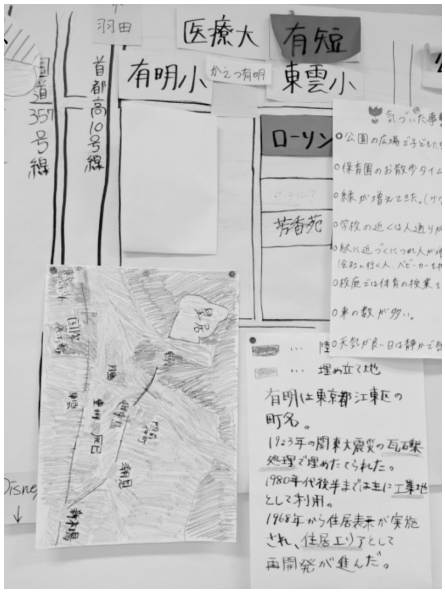
感想11　前回の授業の中でも、自分が子どもと同じように過程の中での発見をすることができた。そうして自分で実際に体験することで、子どもたちがどんなことに気づき、興味を持つのかを具体的に想像したり、過程を体験しないと気づかないことなども発見したりすることができた。体験する授業では、そうした楽しみがあり、今まで知らなかったことを楽しく知ることができるのが良いと思う。そうした発見から更に子どもの発想や興味をひけるような工夫ができるようになればいいと思う。

教師も子どもと同じように過程の中で発見をする。そのことにより、子どもの気づきを具体的に想像できるようになるのだと、それに気づいたことが大発見である。

(2) 学生とともにつくる授業へ

自身の授業実践を活用した「生活科指導法」の授業だったが、自身の実践の紹介よりも興味深かったのは、大学生といっしょに行った有明の町探検の実践だった。昨年は、いっしょに歩いてオリンピック関連の工事がどんどん進んでいることに驚いた。大学の向かい側は、いつも工事中だったが、市民のための遊歩道がオリンピック後にできるのだという。

今年度は、学生がグループごとに出かけて調べてきたことを掲示物にまとめ、発表し合った。質問をして課題が見つかると更に調べに行くという活動を行った。遅刻をしてグループ



有明の町探検の地図づくり

活動に間に合わなかった学生は、一人で有明の埋立地の歴史をしらべ、関東大震災の瓦礫で埋め立てられてできた街だということもわかった。

毎年、少しずつ謎解きが進んで町の様子が学生たちの手で解明されていくことは、興味深い。来年度からの授業は、学生たちの手による町探検の実践をこの授業のもう一つの柱にしていきたい。

引用文献

A　山嵜早苗2007「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」『第56回読売教育賞　受賞者論文集 』pp67-81読売新聞社

B　山嵜早苗2006「生活科の学習を中心にした表現活動と豊かなふれ合いの教育」『教育研究論文集』千葉教育弘済会

C　山嵜早苗2016「ヤゴを育てて問いを立てる」1999「生き物を育てた喜びと悲しみを心に刻む」

D　山嵜早苗2011「なかよし学校たんけん」『わたしとせいかつ』上　みんななかよし教師用指導書　地域実践事例集pp32-37　日本文教出版

E　山嵜早苗2014「合科学習で生き生きと成長した子どもたち―生活科学習における合科的学習の可能性―」『歴史地理教育』１月号

F　中野輝雄2014「親子自然教室」他

注１　さとうわきこ1989『よもぎだんご』福音館書店